FAIRY WIND ～妖精は風の中で笑う～

爛琥かげまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＦＡＩＲＹ　ＷＩＮＤ　～妖精は風の中で笑う～

【Ｎコード】

Ｎ５１８２Ｗ

【作者名】

爛琥かげまる

【あらすじ】

そこには、頼もしい仲間がいる。そこには、大切な家族がいる。そこには、愛しい人がいる。魔導士ギルド「フェアリーテイル」で繰り広げられる、ラブありバトルありのファンタジー。◇◇◇転生・トリップ物ではありません。オリ主最強ではありませんが、そこそこ強いです。基本ストーリーは原作なぞり。

序章　ルア・レヴァテイン

「エルフマン、右だ！」
「おぉ！　ビーストアーム“黒牛”！！」
右腕を黒い獣の腕に変質させたエルフマンが、巨大な獣に向かって飛びだした。その後ろから一人の青年が飛びあがり、右手に魔力を集中させる。瞬間、青年の鮮やかな銀の髪の毛が風に揺れる。
「疾風（ゲイル）！！」
青年の右手から放たれた突風に動きを止める獣。その隙をついてエルフマンが獣の脇腹を殴打した。獣は白目を剥き、地面に沈んだ。指がピクピクと動いているが起き上がる気配は無い。中途半端に開いた口からは唾液がだらしなく流れている。
「気絶したな」
着地を決めた青年は倒れた獣の頭部の近くにしゃがみこみ、様子を確認している。
「このくらい、漢ならば当然！」
「お疲れ、エルフマン」
「ルアもな」
青年のねぎらいに、エルフマンはニカッと笑って答えた。青年、ルア・レヴァテインはマントを風になびかせながら、獣に背を向ける。エルフマンもそれに倣い、２人で歩き出した。
「あーあ、ちゃんと報酬貰えるかねぇ……要人護衛なのにエルフマンは要人を殴るし」
「う、それは……あのおっさんが『男は勉学と教養だ』なんて言うからよ……」
「まぁ少なくとも移動中の危険は排除してやったんだから、最低限の報酬はもらわないとな」
要人護衛の依頼。それが彼らの今回の仕事だった。一応依頼は順調にこなしていたのだが、突然森から巨大な獣が飛び出してきたの

だ。依頼内容にモンスターとの戦闘は含まれていなかったが、当然、依頼人が獣に襲われて怪我をされては仕方ないので撃退。ルアとしてはその分の追加報酬が欲しい所なのだが、護衛対象の貴族がかなりケチくさいことと、エルフマンが要人を殴ってしまったために追加報酬は望め無さそうだ。

「とにかく一度依頼人の所に戻って、ギルドに帰ろうぜ」

「そうだな……なぁ、ルア」

「ん？」

森の中を歩くルアとエルフマン。突然エルフマンがルアに話しかけた。

「あんなに強いのに、どうしてS級魔導士の試験を辞退するんだ？」

エルフマンの問いにしばらく黙るルア。少しして、言いにくそうに口を開く。

「……リサーナが死ぬ所に居合わせてない俺が言うのも何なんだけど…」

そこまで言うと、エルフマンはルアの言いたい事を悟ったのか、手を広げて制した。言わなくてもいいと言うように、ルアの言葉を遮って続ける。

「姉ちゃんを守りたいのは俺も同じだが、ルアの方が強いのもわかっているさ。俺に遠慮する必要はねぇよ。女を守るために力を手に入れるんだ。漢ならな！」

「ハハッ、相変わらずだな。でもやっぱり、昇級試験を受けるならお前とちゃんと戦いたいな」

「……じゃあ、今年の試験には絶対出るぜ。その時は漢として、全力で勝負だからな！」

「おう」

ひとしきり笑い合うと、二人は依頼人の元へ戻って行った。体力も魔力も消耗して疲れてはいたが、二人の心はどこかすっきりとしていた。

ルア・レヴァテインは6年前にミラやエルフマン、リサーナらとほぼ同時期に「妖精の尻尾（フェアリーテイル）」に参加した。年が近いこともあってか、同期の彼らとはギルド内でも仲良くやっていた。ミラはエルザと仲が悪く、2人の争いに巻き込まれてナツやグレイと戦わされる羽目になったのも、何度あったことか。ルア自体はエルザと仲が悪いわけではないのだが。

さて、森から出て依頼人の待つ魔導四輪の所へ戻ってきた二人だが、当然のように依頼人からガミガミ怒鳴られた。一応の報酬はもらったので、ルアとエルフマンは釈然と無いままも帰路につくことにした。すると二人が移動用に使っていた馬車の扉が開き、中から緑色の猫が飛び降りてきた。

「おう、カーム。ただいま」

「2人共お帰り。遅かったじゃない」

「悪い、悪い」

カームと呼ばれた猫は、ルアの頭の上に乗ると疲れたように大きく伸びをした。

「あんな面倒くさい男の相手、私一人に任せないでよね」

そう言うカームだが、一人で馬車にいたところを見ると、途中で投げ出してきたようだ。

「そのくらい文句を言わずやり遂げろ！　漢ならな！」

「私は女よ」

「ははは……そういや例のモンスター討伐の依頼にいったエルザも、そろそろ戻ってくる頃かね」

ふと思い出したように言ったルアの一言に、エルフマンがわかりやすいほど動揺を見せた。

「お、おい……思い出させるなよ」

「怖いのか、エルフマン？」

「お、漢ならば怖いはずがない！」

ギルド「妖精の尻尾（フェアリーテイル）」に所属している者の大半は、最強の女魔導

士と名高いエルザ・スカーレットを恐れていた。仲間思いで優しい女性なのだが、その圧倒的な強さは頼もしさと同時に恐ろしさも生む。しばらくのんびり和気藹々としていたギルドも、エルザが帰ってくればキリッとした雰囲気になるだろう。

（……いや、うちのギルドは変わんねぇよな。いつだって大騒ぎだ）

ルアは一人苦笑した。笑い、笑われながら、二人と一匹は自分達の家（ギルド）に戻っていく。とても大切で、愛しくて、そして命をかけてまで守りたい女性の待つ所へ。

「ただいま、姉ちゃん」

「ただいま、ミラ」

「3人ともおかえり！」

――その声が聞きたいがために。

序章　ルア・レヴァテイン（後書き）

というわけで、転生でもトリップでもないオリ主フェアリーテイルです。
個人的にもかなり好きな作品なので、世界観やキャラクターをぶち壊さないように慎重に書いていきます。
設定とかちゃんと固めたいので、さっそく次話から更新遅くなるかもです。ごめんなさい。

ところで、ギルド名は「妖精の尻尾」か「フェアリーテイル」どっちかにした方がいいですかね。
ルビ付けようとすると「尻尾」だけにかかっちゃうし、
全体にルビ付けると、ＩＥ使ってない人とかケータイで見る人には記号のまま出ちゃうし。

第1話　妖精の尻尾

フィオーレ王国
人口１７００万の永世中立国――そこは魔法の世界。
魔法は普通に売り買いされ、人々の生活に根付いていた。そして、その魔法を駆使して生業とする者共がいる。人々は彼らを魔導士と呼んだ。
魔導士達は様々なギルドに属し、依頼に応じて仕事をする。そのギルド、国内に多数。
そしてとある街、とある魔導士ギルドがある。かつて、いや、後々に至るまで、数々の伝説を生みだしたギルド。
妖精の尻尾－フェアリーテイル－

魔導士ギルド「妖精の尻尾（フェアリーテイル）」は朝からいつものように騒がしかった。ボロい酒飲み場だというのに、こんな風に暴れまわっていたらいつか本当にぶっ壊れてしまうのではなかろうか。もっとも、そんな心配をする者は、ここにはいないようだが。
「おいおい…」
俺ことルア・レヴァテインはカウンター席に座り、新聞を眺めていた。ジョッキを洗いながらミラは「どうしたの？」と聞く。
「ハルジオンの港半壊って……ナツめ、いくらなんでもやりすぎだろ」
「あらぁ、さすがはナツね」
呆れる俺に、ミラは苦笑する。新聞の一面を飾っているのは、もはや原形をとどめていない大きな船と、ボロボロになったハルジオンの港の写真だ。
「罪人ボラを検挙できたからお咎め無しになったのはラッキーだったか……ん？　ナツってイグニールに会いに行ったんだよな？」

火竜イグニールというのはナツの親であるドラゴンらしい。ハルジオンに火竜（サラマンダー）がいるという噂をギルドのメンバーから聞いたナツは、次の瞬間にはハッピーと共にハルジオンに向かっていた。苦手な列車に乗って。

「そうね。まぁでも、事件に巻き込まれるのもナツらしいといえばナツらしいじゃない」

「ミラちゃーん！　こっちビール3つお願い！」

「はいはーい。じゃあちょっと行ってくるわね」

俺とミラの会話を遮るように、テーブル席に酒仲間と共に座っているワカバがビールを注文した。くそっ、ワカバめ、ミラにデレデレしやがって。

ミラは慣れた手つきでジョッキ3本にビールを注ぐと、盆に乗せて運びだした。

「にしても、よく朝から酒が飲めるよな……カナはアレだけども」

いつもの賑やかな酒場をぼんやりと見ていると、ワカバがパイプからハートの形の煙を出してミラに迫っているのを見つける。その瞬間、俺は飛び出していた。

「ワカバぁぁぁ！！　ミラに手ぇ出してんじゃねぇぇえええ！！」

とりあえずミラを抱きかかえるようにしてワカバから離れさせ、朝から酒を飲んで「最近の若いモンは云々」という話に花を咲かせているこのオヤジに手を向けた。

「る、るるるルア！？　朝から元気じゃねぇか」

ワカバの声は若干裏返っていた。

「やかましい、ふっ飛ばされてぇかぁ！？」

右手に魔力がこもる。ワカバはヒィィと情けない悲鳴を上げているが、ミラは俺の後で「あらあら、困ったわね」と全然困ってないように笑っている。少し脱力。

「あ」

ミラが何かに気付いた。俺も振り返ると、入口の方から何やらドスドスという足音が聞こえてくる。ちなみにワカバは隙をついて逃

げだしやがった。
「ただいまー！！」
幾分怒気を含んだ声を発して、妖精の尻尾（フェアリーテイル）の魔導士、ナツ・ドラグニルが入ってきた。後ろで小さく「ただー」と省略しながら言っているのはナツの相棒であり猫のハッピー。
「ナツ、ハッピー。お帰りなさい」
ナツは挨拶もそこそこに、「火竜（サラマンダー）の情報、ウソじゃねぇか！」と近くにいたギルドのメンバーを蹴っ飛ばした。大方、その男がナツに嘘の情報を与えたのだろうか。とはいえ男は蹴っ飛ばされた上にテーブルは真っ二つに崩れた。少し可哀想だ。
「あら……ナツが帰ってくると、さっそくお店が壊れそうね」
「壊れてるよ！」
うふふ、と笑うミラに、ワカバがつっこむ。
「ナツが帰ってきたってぇ！？　テメェ、この間の決着（ケリ）つけんぞ！」
グレイが早速喧嘩を吹っ掛けているが、毎度のようにパンツ一丁だ。ひどい時はパンツすら履いていない。全く、グレイの露出癖にはこまったもんだ。
「グレイ、服」
「はっ！？　いつの間に！」
しかも自覚していない。
エルフマンは「漢なら拳で語れ！」と喧嘩に参戦するが、逆にナツとグレイに吹っ飛ばされる。ロキはロキで、相変わらず女の子と一緒に喧嘩の傍観だ。
（いつでも変わらんなぁ）
思わず苦笑。おっと、ミラが動き始めたから慌てて追いかける。そばでミルクを飲んでいたカームも付いてきて、俺の肩に乗った。
「あらぁ、新入りさん？」
ミラが向かった先にいたのは、ミラに負けず劣らずのスタイルを持つ女の子だった。金髪の髪の毛をサイドでくくり、何故か床で伸びていることを除けば美少女だろう。腰に下げられた鞭に目が行っ

たが、とりあえず気にしないことにする。
「ミッ……ミラジェーン！？　キャー、本物！」
新入りの女の子はミラを見てすぐに飛び上がると、握手をした手をブンブンと振り回した。
「何だ、ナツに連れてこられたのか？」
「ルア・レヴァテイン！　すごい！　こっちも本物だぁ！」
俺も声をかけると、彼女の意識が今度はこちらに来た。先ほどと変わらない、キラキラとした目で俺を見上げる。
「え、何、俺ってそんなに有名なの？」
「週ソラ見ないの？　あなた、結構な頻度でのってるわよ」
カームに言われるが、そもそも俺はあまり雑誌を読まない。ちなみに週ソラとは「週刊ソーサラー」という魔導士専門の週刊誌だ。
「ふーん。君、名前は？」
「あ、あたしはルーシィです」
ルーシィ、ね。ちなみに気になっていた鞭について聞いてみる。
「その鞭って、君の趣味か何か？」
「武器です！……ってか、アレ止めなくていいんですか？」
趣味じゃなかったのか。
「いいのよ、いつものことだから」
「はぁ……」
「新人にはちと刺激が強いかもな」
「おふっ」
ルーシィをからかったりしていると、ナツに吹っ飛ばされたのか、グレイが突っ込んできた。ナツは得意気にグレイのパンツをひらひらとかざしている。つまりグレイは……そういうことだ。
何もまとわぬ自身の下半身を見てグレイが叫ぶ。
「あー！　俺のパンツ！」
何故かルーシィの方を向きながら。
「こっち向くなぁー！！」
「お嬢さん、よかったらパンツを貸して……」

「貸すかぁ！」
デリカシーに欠けすぎているグレイに、ルーシィがビンタをかました。ははっ、確かにこりゃあ、刺激が強すぎるかな。
「ふふ、結構…」
ミラが何かを言い掛けるも、とんできた酒瓶が頭を強打。そのままばたりと床に倒れた。
「ミラ！」
「ミラさん！？」
慌てて俺とルーシィが駆けよる。頭から血を流しているがミラは大丈夫そうだった。だが。
「結構、楽しいでしょ？」
だが、だ。
ブチンと、何かが切れる音がする。ルーシィがビクビクしながら俺の方を振り向く。新入りの子に早速面倒な所を見せつけることになるかもしれんが、そんなことどうでもいい。くそったれどもが、ミラに怪我させやがって。
「テメェら……ミラに何してくれやがったぁぁぁ！！」
足元に魔法陣が現れ、そこから突風が上に向かって吹く。その衝撃でギルドの天井の一部が吹っ飛んだが、一々気にしていたらこのギルドでやっていけない。
俺の魔力に触発されたのか、あちこちで呆れながら、はたまた嬉しそうに、様々なメンバーが魔力を解放し始める。
「あんたらいい加減にしなさいよ……」
酒樽に座りながら、カナは取りだしたカードに魔力を込める。
「あったま来た……」
「ぬおおおおおおおおおおお！！」
「困った奴らだ……」
グレイは両手を合わせ、エルフマンは片腕を石化させ、ロキは指にはめた指輪を輝かせる。
「かかってこい！」

ナツは両手から炎を噴き出して戦う気満々だ。
そうこうしている間にも俺の右手には魔力が込められ、天井を吹っ飛ばしたものとは比べ物にならない風を放つべく、今か今かと振動している。
「そこまでじゃ……」
「疾風(ゲイル)……」
「やめんかバカタレ！！」
「ぐっはあああああ！？」
ギルド内を吹っ飛ばそうと呪文を詠唱をした瞬間、巨大な何かによって俺が吹っ飛ばされた。俺はそのまま慣性にしたがって飛び続け、ギルドに寄せられた依頼が張られたリクエストボードにめり込んだ。痛い。
ギルド内は一気に静まり返り、誰もが俺を吹っ飛ばした巨人の方を向いた。
「あら……いたんですか、マスター」
ミラの発言に、ルーシィが目を大きくしている。確かにこんなにでかい姿を見れば驚くよな。
「だーっはっはっはっ！　みんなしてビビリやがって！　この勝負は俺の勝ぴ……」
ぐちゃ、と嫌な音がしてナツが踏みつぶされた。マスター・マカロフはミラを見、その隣にいるルーシィを見つけて口を開いた。
「む、新入りかね？」
「は、はい……」
ルーシィは涙目になりながら答えた。マスターはふんぬぅぅぅと声を漏らしながら、だんだんとサイズダウンしていく。やがてルーシィの腰ほどの大きさに“戻る”と、軽い感じで手をあげた。
「よろしくネ」
壮齢の者とは思えない身のこなしでギルドの二階へと跳び上がり……俺が疾風(ゲイル)を発生させて軌道を変え、柵に激突させた。
「……まぁよい」

マスターは腰をさすりながら柵の上に立つ。そういや最近腰痛がひどいとか言っていたっけ。まぁいいや、気にしない気にしない。
「ま～たやってくれたのう貴様ら。見よ、評議会から送られてきたこの文書の量を」
マスターの左手には何枚もの書類の束が握られていた。思わず「うぐ」と声が漏れる。俺だけではなく、心当たりのある者全員が、だ。ここのギルドの場合、ほとんど全員にあたるのだが。
「まずはグレイ。密輸組織を検挙したまではいいが……その後街を素っ裸でふらつき、挙句の果てに干してある下着を盗んで逃走」
「いや、だって裸じゃマズイだろ」
「まずは裸になるなよ」
「エルフマン！　貴様は要人護衛の任務中に要人の暴行」
「『男は学歴よ』なんて言うからつい……」
ああ、あれはこの前のやつか。
「カナ・アルベローナ。経費と偽って某酒場で呑むこと大樽十五個。しかも請求先が評議会」
「バレたか……」
「ロキ…評議員レイジ老師の孫娘に手を出す。某タレント事務所からも損害賠償の請求がきておる」
ここまでは、「やりすぎだろ～」と傍観者に徹していた俺だが、マスターの次の説教の矛先はあろうことか俺に向かった。
「笑っている場合ではないぞルア。ミラのグラビア撮影の度に機材を壊しているのは貴様じゃな」
「や、だって他の奴なんかに見せたくないし」
俺の答えにマスターは「はぁ……」と大きく溜息をついた。俺に呆れているのもあるだろうが、それだけではない。ギルド最大の問題児は俺だけでなくもう一人いるのだから。
「そしてナツ……デボン盗賊一家壊滅するも民家七軒も壊滅。チューリィ村の歴史ある時計台倒壊。フリージアの教会全焼。ルピナス城一部損壊。ナズナ渓谷観測所崩壊により機能停止。ハルジオンの

港半壊……」
　出るわ出るわ、聞いただけでもとんでもない被害だ。ルーシィも顔をひきつらせている。多分、「本で読んだ記事はほとんどナツだったのね……」ってとこだろう。
「アルザック、レビィ、クロフ、リーダス、ウォーレン、ビスカ……貴様らぁ、ワシは評議員に怒られてばかりじゃぞぉ……」
　マスターの体が震え、俯いた。ギルド内が沈黙に包まれる。
「だが……」
　マスターの左手から炎が噴き出した。束となっていた書類が一瞬にして炎に包まれる。
「評議員などクソくらえじゃ」
　ってか、リクエストボードに埋まってる場合じゃねぇ。マスターが大事な事を言っている間に何とか抜けだし、ミラの元へ行く。どうせ評議員から難癖付けられる度に言っているんだ。まあ、何度聞いても感心できてしまうのはマスターの為せる業って奴かな。
「よいか、理を超える力は全て理の中より生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の内にある“気”の流れと、自然界に流れる“気”の波長があわさり初めて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力を使う。いや、己が魂全てを注ぎ込む事が魔法なのじゃ。上から覗いてる目ン玉気にしてたら魔道は進めん。評議員のバカ共を恐れるな。自分の信じた道を進めェい！　それが妖精の尻尾（フェアリーテイル）の魔導士じゃ！」
「わあ……」
　隣で感心しているルーシィの肩にポンと手を置いた。
「妖精の尻尾（フェアリーテイル）へようこそ。歓迎するぜ、ルーシィ」

「ってことは、他の街じゃナツが火竜（サラマンダー）って呼ばれていたのか」
　マスターの言葉に興奮した連中が宴を始め、俺はどんちゃん騒ぎから逃げるようにミラのいるカウンター席に座った。そこにいたル

ーシィから話を聞くと、ハルジオンでナツと中々衝撃的な出会いをしたらしい。
「妖精の尻尾（フェアリーテイル）の火竜（サラマンダー）って言えば、結構有名になってるわよ」
雑誌なんかで俺らの起こした被害が紹介される時に一緒に火竜という名前が出てくるらしい。うーん、やっぱり雑誌とか読んだ方がいいのか。
「おまたせ」
ミラがスタンプを持ってやってきた。ルーシィにギルドマークを刻印するための物だ。ルーシィが差し出した右手の甲にポンと押すと、それで終わりだ。魔力のこもったスタンプなため、ちょっとやそっとの事じゃ消えない。
「わぁ！　ナツ！　見てー！　ギルドのマーク入れてもらっちゃったぁ！」
「良かったなルイージ」
「ルーシィよ！」
嬉しそうにマークをナツに見せる。それを見てワカバたちオヤジどもは鼻の下を伸ばしてルーシィを見つめていた。確かに可愛いもんなぁ、ルーシィ。
「可愛いわよね、ルーシィ」
「あ？　まあな。でもやっぱミラが一番可愛いよ」
「あらあら」
「もしかして、二人って付き合ってるの？」
俺達を見てルーシィが驚いたように言った。思わず顔を見合わせる俺とミラ。少しびっくりしているミラが可愛い。
「ははっ、違うよ。別にそんなんじゃないんだ」
「そうなの？　……あっ、もしかして」
「ちなみに兄弟ってのも違うからな。よく間違えられるけど」
主に髪の毛の色のせいで。俺とミラ、エルフマン、そして二人の妹のリサーナはよく四兄弟だと間違われることがあった。実際、同じ時期にギルドに入ったからよく一緒にいたし、似たようなもんな

んだけどさ。俺達四人は……
　そんな時だった。横の方から何やらマスターと言い合っている声が聞こえたのは。
「父ちゃんまだ帰ってこないの？」
「くどいぞロメオ。貴様も魔導士の息子なら、親父を信じて大人しく家で待っておれ」
「だって……三日で戻るって言ったのに、もう一週間も帰ってこないんだよ……」
あの子は確か、マカオの息子のロメオだっけ。親父のロメオはハコベ山にバルカン討伐の依頼を受けに行ったはずだ。そう遠くは無いが……確かに一週間も音沙汰無しってのは怪しいな。
「探しに行ってくれよ！　心配なんだ！」
「冗談じゃない！　貴様の親父は魔導士じゃろ！　自分のケツも拭けねェ魔導士なんぞ、このギルドにはおらんのじゃあ！　帰ってミルクでも飲んでおれい！」
　そうマスターが切り捨てると、ロメオは涙を我慢しながらプルプルと震え、「バカー！」と一発マスターを殴ってギルドから出て行った。
「厳しいのね」
「ああは言っても、本当はマスターも心配してるのよ」
「そうだな。にしても一週間か。……マカオに何かあったのか」
　ズビシと、何かがめり込む音がした。ナツが依頼書をリクエストボードにめり込ませた音だ。
「オイィ！　ナツ！　リクエストボード壊すなよ！」
　ナブの小言にも聞く耳もたずといった様子で、黙々と荷物をまとめて歩き出すナツ。ハッピーが慌てて追いかけていった。
「マスター、ナツの奴、ちょっとヤベェんじゃねぇの？」
　どうでもいいがナブ、お前ちょっとは働いた方がいいんじゃねぇの？
「進むべき道は誰が決めることでもねぇ。放っておけい」

マスターはニヤリと笑うとパイプをくわえた。
「ど、どうしちゃったの？　アイツ、急に……」
「ナツもロメオくんと同じだからね。自分とだぶっちゃったのかな」
「え？」
横ではミラがルーシィにナツの昔話を話そうとしていた。
「ナツのお父さんも出ていったきり帰ってこないのよ。お父さんって言っても、育ての親なんだけどね。しかもドラゴン」
「ナツってドラゴンに育てられたの！？　でもそんなの信じられるわけ……」
「あいつが小さい頃だ。そのドラゴンに森で拾われて、言葉や文化、魔法なんかを教えてもらったんだと。だがある日、そのドラゴンはナツの目の前から姿を消した」
気がつけば俺も口をはさんでいた。あいつらの気持ちは、よくわかる。今は伏せておくけど、俺だって、似たような事があったからな。
「そっか……それがイグニールなんだ……」
「ナツはね、いつかイグニールと会える日を楽しみにしているの。そーゆーとこが可愛いのよねぇ」
ミラは笑いながらも、どこか悲しげな表情で、グラスの中身を指でかき混ぜた。
「私たちは……妖精の尻尾（フェアリーテイル）の魔導士達は……みんな何かを抱えてる。キズや、痛みや、苦しみや……私も……」
「え？」
「ミラ……」
不安そうに顔を覗きこむ俺とルーシィを見て、ミラは笑った。やっぱり少し悲しそうな笑顔で。
「ううん、何でもない」
そう。俺達のギルドは、みんなそうだ。だから何よりも仲間を大切にするし、仲間のためなら命を張れる、そんな奴らばかりだ。
ミラだけじゃない、俺だって……

第1話　妖精の尻尾（後書き）

試験的に一人称形式で書いてみました。
そもそもＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬという作品がルーシィの視点で描かれていること、
それとルアというキャラクターをつかんで欲しいということで書いてみたんですが。

ううむ、もうちょっとクールでかっこいい感じでもよかった気がするなぁ。
基本的にルアはミラが愛しくて仕方ないのです。

第2話　火竜と猿と牛のち音楽

今、俺達はハコベ山を馬車で登っている。ハコベ山っていうのは春でも夏でも一年中雪が積もっている山で、色々な魔獣（モンスター）が生息していることで有名だ。マカオが討伐しにいったバルカンや、巨大な図体のわりに草食だというブリザードバーンとかな。

「でね！　あたし今度ミラさんの家に遊びに行く事になったの！」

ルーシィが楽しそうに話しているのを、俺は組んだ両腕に頭を乗せながら聞いている。

「下着とか盗んじゃダメだよ」

「盗むかっ！」

「ミラの下着を盗む奴ぁ、たとえ女の子でも容赦しないぜ」

「だから盗まないって！」

「ところで何でルーシィがいるんだ？」

馬車に揺られて早くもグロッキーなナツが、冷や汗びっしょりでうめくように言った。

「何よ、何か文句あるの？」

「そりゃもう色々と……」

「あい」

唇を突き出してぶーたれるルーシィ。ちなみに「あい」というのはハッピーの口癖みたいなものだ。

「だってせっかくだから、妖精の尻尾（フェアリーテイル）の役に立つ事したいな～なんて」

ギルドを出てハコベ山へ向かうナツ達を見て、ルーシィは着いていきたそうな顔をしていたので、良ければ一緒に行こうかと俺が誘ったのだ。流石に新人とあのナツだけだと不安材料ばかりなので、自称妖精の尻尾（フェアリーテイル）唯一の良心である俺が行った方が良いだろうという判断。まぁ本当はミラに頼まれたからなんだけどな。「ナツとルーシィの面倒見てあげてね。お願い」なんて手を合わせられたら、断

る方がおかしいってもんだ。
「それにしても、あんた本当に乗り物ダメなのね。なんか色々可哀想」
真っ青な顔でハァハァ言っているナツを見ていると確かに可哀想だ。可哀想というより変態に見えるのは気のせいだ。
「マカオさん探すの終わったら、住む所見つけないとなぁ」
「一応ギルドにも休む所があるから、しばらくはそこを使えばいい」
「オイラとナツん家住んでもいいよ」
「本気で言ってたらヒゲ抜くわよ猫ちゃん」
ルーシィ、顔が笑ってない。
「ナツ達の家は結構散らかってるけど、ルーシィがどうしてもっていうならいいんじゃないか」
「そうだね。ルーシィがどうしてもっていうなら、仕方ないかぁ。ね、ナツ」
「お、おう……」
「あれー！？　なんか私があんた達の家に住みたいってわがまま言ってることになってる！？」
「あなた達、本当にルーシィをからかうの好きね……」
ルーシィはからかうと本当に面白いな。からかわれているルーシィと呆れているカームには悪いが。
と、突然ガタンと馬車が揺れ、動きが止まった。
「止まった！」
一瞬でナツが生き返る。相変わらず復活の早さが尋常じゃ無いな。普通酔ってる症状ってしばらく続くもんじゃないか？
「着いたの？」
ナツとルーシィがキョロキョロとあたりを見渡す。もっとも窓はカーテンを閉めてるため外の様子は何も見えないのだが。
すると鼻をすする音と共に御者の死にそうな声が聞こえてきた。
「す、すんません……これ以上は馬車じゃ進めませんわ」
ってことは、ハコベ山に到着か。扉を開けて外に出たルーシィが

驚いている。
「いくら山の方とはいえ、今は夏でしょ！？　こんな猛吹雪おかしいわ！」
　だがそれがハコベ山だ、ルーシィ。ナツはその体質上大丈夫そうだし、ハッピーやカームも何だかんだで寒さには耐えられそうな感じだな。俺はそんなに強い方じゃないが、泣き言は言ってられない。だがルーシィの薄着は流石にまずいよな。
「さ……寒っ！」
「そんな薄着してっからだよ」
「あんたも似たようなものじゃない！」
　まぁ、ナツだし。
「そんじゃオラは街に戻りますよ」
　そういって御者は手綱を引き、来た道をUターンさせて帰っていった。
「ちょっとォ！　帰りはどーすんのよ！」
「あいつ本当うるさいな」
「あい」
「まぁ、そういってやるなよ。おーいルーシィ」
　声をかけると、大人しくルーシィはやってきた。あーあー、女の子が鼻水垂らしてちゃせっかくの綺麗な顔が台無しだろうに。
「ほら、貸してやるから、これ着てろ」
　そう言ってマントを脱いで貸してやる。
「い、いいの！？　ありがとうルアぁぁ！」
　頷くとルーシィは感激しながら御礼を言ってマントにくるまった。とにかく涙と鼻水を拭きなさい。
「あなただって寒いんじゃないの？」
「女の子を凍えさせるよりはマシだって。ミラにも頼まれたしな」
　カームは溜息をつきながら俺の頭にのるが、微笑んでいた。一応俺の方が年上なんだけど、カームのこの年上の余裕みたいな態度はどうしても勝てない。猫の年齢とかよくわかんないけど。

「ひひ、ひ、開け……ととと時計座の扉！　ホロロギウム！」
ルーシィはそれでもまだ寒いようで、鍵を取り出すと門（ゲート）を開け、その場に時計座の星霊を召喚した。ということは、ルーシィは星霊魔導士なのか。結構話したけどそういえばルーシィがどんな魔法を使うかは全く聞いていなかったな。
ルーシィはマントにくるまると、ホロロギウムの中に入ってしまった。
「『あたしここにいる』と申しております」
中にいるルーシィとの会話はホロロギウムが仲介役になることで可能らしい。
「何しに来たんだよ」
「『何しに来たといえば、マカオさんはこんな場所に何の仕事をしに来たのよ！』と申しております」
あれ、ルーシィは知らなかったのか？
「知らねえで着いてきたのか？　凶悪モンスター“バルカン”の討伐だ」
ルーシィの顔が青くなったように見える。寒さのせいだけじゃないだろう。
「『あたし帰りたい』と申しております」
「はい、どうぞと申しております」
「あい」
「まぁまぁまぁまぁまぁ」
二人（三人？）の掛け合いが面白いので俺は傍観役に徹してみることにする。とにかくマカオを探さないとな。歩き出す俺達の後ろから、ホロロギウムがひょこひょこと足も無いのについてくる。どうやって動いてんだアレ。
「マカオー！　いるかー！？　バルカンにやられちまったのかー！？」
ナツが大声で叫ぶが、この猛吹雪じゃ例えマカオがいたとしても聞こえやしないだろう。

だが、何やら遠くで雪を踏みしめるような音がする。その音はだんだんと近づいてきた。俺とナツは目を合わせ、音がする方を目を凝らしてみる。
その瞬間、巨大な何かが降ってきた。間一髪、後ろに飛んでかわす。俺たちに飛びかかってきたのは、ゴリラによく似た大きな生物、バルカン。臨戦態勢を整える俺たちだが
「ウホッ！」
バルカンは奇妙な声をあげると、俺達を無視して俺達の後ろの方へ走っていった。
「まずい、後ろにはルーシィが……」
「人間の女だ！」
バルカンはホロロギウムを捕まえると、下劣な笑みを浮かべながら中にいるルーシィを見つめる。ルーシィは悲鳴をあげる。が、聞こえない。ホロロギウムもあせっているのか、ルーシィの悲鳴を俺達に伝える事は無かった。
「うほほー！」
バルカンはホロロギウムを小脇に抱えるとどこかへ走り去っていく。
「おお、しゃべれんのか」
「あい」
「着眼点違うだろ。バルカンってエロかったんだな」
「あなた達、こんな時まで……」
「『ってか助けなさいよォオオオ！』と申しております」
ホロロギウムの声が遠くからぼんやりと聞こえる。
「しゃーねぇ、助けに行くか！　ハッピー！　ルア！　カーム！」
「あいっ」
「おう！」
「ええ！」

ルーシィは後悔していた。ナツは強いし、ルアは優しいから、何の心配もしていなかった自分がバカみたいだ。ホロロギウムの中でルーシィは興味本位で着いてきた自分を呪った。
「どうしてこんなことになってるわけ……」
「私に申されましても……」
ここはおそらくバルカンの住処。バルカンはドラミングや口笛を吹きながらホロロギウム（の中のルーシィ）の周りを飛び回っている。物凄いはしゃぎようだ。
「あの猿、何かテンション高いし！　もう……ナツとルアはどうしちゃったのよぉ」
あの二人に頼り切っているのはどうかと思うのだが、この現状をどうにかするにはあの二人が助けにくることを祈るしかない。どうか二人が早くこの場所を見つけて来ますようにと祈っていると、目の前にバルカンの顔がある。
「きゃあ！？」
ルーシィは飛び退くが、ホロロギウムの中にいるためバルカンとの距離は変わらない。
「女！」
当のバルカンは鼻の下をこれでもかと伸ばし、頬をデレデレと真っ赤にさせてルーシィを見ている。ガラス越しにキスでもしてしまいそうな勢いだ。ハァハァというバルカンの粗い息遣いでホロロギウムのガラスが曇る。
と、その瞬間、「ぽんっ」という軽い音と共にホロロギウムの姿が消え、ルアのマントにくるまるルーシィがバルカンの前に無防備で投げ出された。
「ちょ、ちょっとぉ！　ホロロギウム！　消えないでよぉ！」
「時間です。ごきげんよう」
「延長よ、延長！　ねぇ！」
不格好な耐性で後ろにさがるルーシィ。じりじりと距離をつめていくバルカン。生理的に受け付けない嫌悪感と恐怖に思わず涙が出

そうになる。
「うおおお！　やっと追い付いたぁぁ！」
「ナツ！」
洞窟の中へ走ってくるナツとルア。二人の姿を見た瞬間、ルーシィは何とも言えない安心感に包まれた。バルカンに襲われる寸前と言う状況は全く変わっていないのだが。
「マカオはどこだぁぁぁおわあああああああ！？」
凍った地面に足を滑らせ、ナツは体操選手さながらの見事な大車輪を見せてルーシィとバルカンの間に割って入った。
「ルーシィ、大丈夫？」
「カーム！　ルア！」
「遅くなって悪い。あの猿に何かされなかったか？」
「あたしは平気。けど、ナツは大丈夫なの？」
地面に顔を思い切りこすりつけたナツを見て、ルーシィが顔をひきつらせながら聞く。だがルアが答える前にナツが飛び起き、バルカンに掴みかかった。
「おい猿！　マカオをどこに隠した！　人間の男だ、男！」
「ナツなら大丈夫だよ。な」
「う、うん、そうみたいね……」
「のわあああああああああああああ！」
「ナツー！」
遠くなっていくナツの叫びに、二人が振り返った。そこには洞窟の壁に開いた穴の外を眺めるバルカン。ハッピーはナツの名を叫びながら外へ飛び出していった。
「ウホッ、男いらん。オデ、女好き」
「ナツ！　ちょっと、死んでないわよね！」
「ああ見えても結構やる奴だ、そう簡単にはくたばらねぇよ」
慌てて穴から外を覗きこむ二人。どうやらここは断崖絶壁の中腹にある洞窟らしく、穴の外は地面が見えない。ここから落ちたとしたら、普通の人間ならまず生きてはいない。

「……大丈夫、よね」
「……多分」
「男いらん！　男いらん！」
バルカンは次の獲物をルアに決めたようだ。太い腕を振り下ろしてルアも落とそうと躍起になっている。
「チィ！　疾風（ゲイル）！」
手から風をおこし、バルカンを押し戻す。風魔法は攻撃範囲が広い代わりに与えるダメージが少ないのが欠点だ。攻撃魔法でも中々決定打になりにくい。
「かといって、こんな狭い場所じゃ、でかい魔法使ったらルーシィもヤバいしな……」
「大丈夫、あたしも戦うわ！　女、女って、このエロザル！　ナツが無事じゃなかったらどうしてくれるのよ！」
ルアの隣に立ったルーシィは、ベルトから下がったホルダーから一本の鍵を取り外した。特徴的な模様が刻まれた、黄金の鍵だ。
「開け、金牛宮の扉……タウロス！」
「ＭＯォォォオオオ！」
ルーシィの命令と共に開かれた門から現れたのは、巨大な斧を背負った牛の星霊だ。
「それ、黄道十二門の鍵？」
「そ！　あたしが契約してる星霊の中で、一番パワーがあるタウロスが相手よ！」
凄まじい筋肉を見せつけているかのような、鍛え上げられた上半身。背負った斧も相まって、そこから繰り出される攻撃の威力は相当なものだろう。戦闘向きでとても頼りになる星霊だなとルアは思った。
「ルーシィさん！　相変わらずいい乳してますなぁ！　ＭＯーステキです！」
ただし、バルカンのように鼻の下を伸ばしてルーシィの胸を見つめていなければ。

「そうだ……コイツもエロかった……」
「星霊って、結構キャラ立ってんなぁ……」
「ルア、感心する所じゃないわよ」
しかしバルカンは、ルーシィ（の胸）にデレデレしているタウロスを見て憤慨している。
「ウホッ！　オデの女とるな！」
「“オレの女”……？　そいつはＭＯ聞き捨てなりませんなぁ」
その言葉を聞き、タウロスは目つきを変えてバルカンに向き直った。その姿はさながら、姫を守る騎士のようだ。
「そうよ！　タウロス、あいつをやっちゃって！」
「“オレの女”ではなく、“オレの乳”と言ってもらいたい！」
「もらいたくないわよ！」
前言撤回、ただのエロ牛だ。ルアはこのエロ牛を騎士に例えた自分がバカみたいに思えた。
「はぁ……ルーシィ。魔力の方は大丈夫か？」
「ちょっと心配。でもこの牛を速攻で倒して、早くナツを探さなきゃ」
「そうだな。突風（ガスト）！」
ルアは両手を後ろに向け、突風を放つ。その勢いを利用して一気にバルカンに近づくと、ルアの接近を許してうろたえているバルカンの顎に右足を蹴りいれた。
「タウロス！」
「ＭＯォォォ！」
タウロスは斧を持ち、バルカンに振り下ろした。流石にバルカンもやられっぱなしではないのか、斧の柄をつかんで攻撃を止める。
「突風（ガスト）！　疾風の槍手（ゲイル・ランサー）！」
右手から突風を出して加速、左手に螺旋状の風を纏い、バルカンの顔を貫こうとした、その時――
「うおおお！？　なんか化け物増えてんじゃねぇか！」
「ＭＯォォォォォォ！？」

突然現れたナツに思い切り殴り飛ばされ、タウロスはその場に倒れ伏した。予想外の事態にルアは魔力の発動を止め、バルカンの動きも止まる。
「人がせっかく心配してあげたのに、何すんのよ！　……てか、どうやって助かったの？」
そこへナツの後ろから翼を生やしたハッピーが現れた。
「ハッピーのおかげさ。ありがとうな」
「そっか、そういえば羽があったわね」
「あい、能力系魔法の翼（エーラ）です」
「ていうかアンタ、乗り物ダメなのにハッピーは大丈夫なのね」
「何言ってんだお前。ハッピーは乗り物じゃなくて『仲間』だろ。ひくわー」
「そ、そうね、ごめんなさい……」
ナツはあからさまにどん引きした表情をしている。
「ウホォォォオオオッ！」
ようやく邪魔者が入ったことを理解したのか、バルカンは雄叫びをあげて走り出した。だが、その直線状にいるナツは後ろを振り向こうとしない。
「いいか、妖精の尻尾（フェアリーテイル）のメンバーはみんな仲間だ」
「来たわよ！」
「じっちゃんもミラも、うぜェ奴だがグレイもエルフマンも」
「ナツ！　行ったぞ！」
「ハッピーもルーシィも、みんな仲間だ。だから……」
ナツは拳に炎を宿しながら、振り返る。バルカンはすぐ目の前に迫っていた。
「火竜の鉄拳！！」
炎の拳はバルカンの腹部に直撃。バルカンはそのまま吹っ飛び、洞窟内の壁の穴にはさまった。
「俺はマカオを連れて帰るんだ。早くマカオの居場所を言わねぇと黒コゲになるぞ」

「ていうかもう、伸びてるけどな」
「なっ……しまったぁぁぁ！」
自身の魔力を炎に変え、拳に宿して敵を殴る滅竜魔法、火竜の鉄拳。竜撃退用の強烈な一撃をまともに受けて、バルカンが無事であるはずがない。三人と二匹が見守る前で、バルカンの体はだんだんと変化し始めた。
「えっ……！？」
「猿がマカオになったー！？」
バルカンは見る見るうちにマカオの姿へと変わっていき、サイズダウンしたことでマカオは壁に開いた穴からふらっと風に揺られ、落下していく。
落ちるマカオの足をつかむナツ。だがナツも勢いに乗って落ちそうになってしまう。慌てて翼（エーラ）を出したハッピーが追い掛け、ナツの足をつかんだ。
「二人は重いよ……！」
「ハッピー！」
同じく翼を出したカームもハッピーと一緒にナツの足をつかむ。
「くっ……」
「重い……！」
ルアとルーシィもそれぞれカームとハッピーをつかんで、どうにか引っ張り上げる。
「はぁ……はぁ……ていうかこういうの、タウロスが適任だろ……」
「うう、ごめんなさい。肝心な時に伸びてるし……」
「いや、元はと言えばナツが殴り飛ばしたのが悪いんだし」
「なっ！？　その牛、仲間だったのかー！？」
「それよりも、今はマカオさんでしょ！」
ルーシィはカバンから救急箱を取り出すと、ハッピーとカームが心配そうに寄り添っているマカオの元へ急いだ。ナツとルアも彼女に続く。
マカオは全身に切り傷や打撲痕が見られ、特に脇腹の傷がひどく、

出血も多かった。
「バルカンは人間を接収（テイクオーバー）する事で生きつなぐ魔物だったのか……」
「接収（テイクオーバー）される前に激しく戦りあったみたいだな」
「ダメ、脇腹の傷がひどすぎて、持ってきた応急セットじゃ間に合わない……」
　出血が止まらない。バルカンに傷を負わされて、その上接収されて三人と戦ったのだ。助かる見込みは絶望的だ。
　そんな中、ルアは一人落ち着いていた。
「カーム、魔笛を出してくれ。それからナツ、止血を頼む」
　二人はその言葉に頷き、ナツは手に炎を纏ったかと思うと、その手をマカオの傷口に押し当てる。ジュッという何かが溶ける音と、マカオの叫び声。
「何してんのよっ！」
「これしかしてやれねぇんだ！　我慢しろよマカオ！　ルーシィ、マカオ抑えてろ！」
　火傷させる事で傷口を無理矢理ふさぐ。こうする事でこれ以上の失血は防ぐ事が出来る。
　出血が収まったのを見て、ルアはカームが取り出したオカリナのような楽器を口にあて、息を吹き込んだ。
「治癒笛（ヒール・オカリナ）」
　冷たく凍った心を融かすような、暖かい音色が洞窟内に響き渡った。だんだんとマカオの苦痛の表情が和らいでいく。
「ルア、それは？」
「これは中に魔水晶（ラクリマ）が入った魔笛、オルフェ・オカリナ。使用者が吹きこんだ魔力によって様々な効力を発揮する音魔法用の魔導具だ。マカオ、死ぬんじゃねぇぞ。ロメオが待ってんだ」
「ふぐっ……あ……」
　マカオの目が少し開いた。ルアの魔法のお陰で回復しているとはいえ、傷はまだ完全にふさがっていない。
「情けねぇ……十九匹は倒したんだ……だが……二十匹目で接収（テイクオーバー）さ

れ……ぐぁっ」
「黙ってろ！　傷口が開くだろうが！」
「ムカつくぜ……畜生……これじゃ……ロメオに合わす……顔が……ねぇ……」
「黙れっての！　殴るぞ！」
ナツがマカオの傷口を強く、しかし包み込むように手で覆う。ルアはオカリナに込める魔力をさらに強めた。
そんな二人を見て、ルーシィは思わずルアの裾をつかんだ。オカリナを吹くルアが彼女に視線を移す。
「すごいなマカオさん……やっぱり、かなわないなぁ……」
「……ルーシィも立派な俺達の仲間だ。これからだよ」
ポンと、ルーシィの頭に手を置く。
オカリナの音色はそれからもしばらく鳴り続けていた。

「いいの、ルアはロメオ君の所に行かなくて」
「いいんだよ。俺は別に何もしてないしな」
妖精の尻尾（フェアリーテイル）に帰ってきた俺は、定位置と化しているミラの目の前のカウンター席に座っている。今頃ナツとルーシィとハッピーがマカオをロメオの所へ連れて行っているはずだ。
治癒笛（ヒール・オカリナ）で多少回復しているとはいえ、先に本格的な手当てをした方がいいのだが……まぁ、息子の前でくらい、かっこつけさせてやらないとな。
「で、どうだった？　ルーシィ」
何だか嬉しそうな表情でミラが聞いてくる。
「黄道十二門の星霊とも契約しているみたいだし、連続で魔法を使えるくらいの魔力はある。そこそこ戦えるし、しっかりしてる。暴走しがちなナツのストッパーにもいいんじゃないかな」
「なら良かった」
ミラの出してくれた一口飲む。ううん、美味いといえば美味いが、

やっぱりアルコールは苦手だ。こんな事を言ったらカナにドヤされるのが目に見えているが。

「ルアー！　ロメオ君が、ルア兄にもありがとうって！」

妖精（フェアリーテイル）の尻尾は今日も賑やかな魔導士ギルドだ。

第2話　火竜と猿と牛のち音楽（後書き）

タウロスの出番とっちゃった。

ちょっと長い気がするけどまぁいいや。

基本的に原作1話分の範囲を1話として掲載していく感じです。

第3話　小犬座の星霊

「え、何？　ルーシィの住む家決まったの？」
「ええ。昨日嬉しそうに言ってたわ」
久しぶりに単独の依頼をこなして帰ってきた俺は、いつものようにカウンター席に座って食事をとっている。うん、やっぱりミラの飯が一番美味い。
ちなみに依頼といっても複雑な魔導楽器の修理という、俺からすれば簡単な物だ。で、その依頼に行っていた間にルーシィの住む家が決まったらしい。
「おおっ、やっと決まったのか！　どこだ？　ミラ、教えてくれ！」
ナツがファイアスパゲティを吸い込みながら話しかけてきた。どうでもいいがこのナツ専用メニュー、盛り付けられた皿が違うだけで同じ炎のような気がするのは俺だけなのか。
「商店街の近くにある部屋よ」
そう言ってミラは紙とペンをリーダスから借りて、何やら地図らしき物をかき始めた。ナメクジがのた打ち回っている軌跡にしか見えないのだが、これがミラ曰くマグノリア商店街付近の地図らしい。うーん、独創的な落書きだな。まぁ、口には出さないけど。
「はい、この星印の所がルーシィの家」
すいませんミラさん、俺には星印が見えません。もしかしてこの不格好なウニみたいな奴が星印ですか。
「ありがとよ。ルアも一緒に遊びに行こうぜ」
ミラの地図がわかんねぇ。助けてくれ。ナツの顔にはそう書いてあった。しゃーない、俺もこの地図を完璧に解読する自信は無いが、一緒に行ってやるとするか。商店街のあたりをうろちょろしてれば見つかるだろ。
「カーム、行くか？」
「面倒だからいい」

「そうか」
カームはレビィと何やら話に花を咲かせている。カームもレビィほどではないが読書が好きなため、たまにこうして一緒に話している場面を見る。
ちなみにレビィ、青い髪の毛をバンダナでまとめていて見た感じは活発そうな女の子だが、あれでなかなか本が好きでインドア派だったりする。それでもギルドの中じゃ実力派だし、マカオなんかよりも動けそうだけどな。
「おーっし！　行くぞルアー！」
「あい！」
ナツはハッピーを連れて、早く出発したいようだ。やっぱり子供っぽい所あるよなぁ、ナツは。依頼をこなす時は結構頼もしい表情をするんだけど。

商店街をうろつく事数十分、ルーシィの家は思ったより早く見つかった。少しアンティークな雰囲気の、中々洒落た建物だ。
「結構大きいな。これで家賃七万は安い方じゃないか？」
建物を見上げて「ほーっ」と息をつく。だが突然ナツに肩を組まれると、引きずられるように歩かされた。
「よーし！　ルア、入ろうぜ！」
「入ろう入ろう！」
「おいおいおい！」
慌ててナツの腕を振りほどく。こいつら自分が何をしようとしているのかわかっているのだろうか。ところがどっこい、ナツは「どうしたんだ？」とでも言いたげな表情を俺に向け、ハッピーに至っては疑問すらも感じていない。さすがに溜息をついたね。
「普通勝手に女の子の部屋に入るか！？」
しかし、俺が呆れながら顔を上げるとそこにはすでにナツとハッピーの姿は無かった。

「ちょ、待って、待てよ！」
二人を追い掛け、仕方なしにルーシィの部屋に向かう。うん、「仕方なし」だ。決して面白そうとか思ったわけじゃない。ルーシィの部屋は、さすがに新居と言ったところか。荷物は片付いているが家具はまだ揃っていないようだ。それでも必要な物がきちんと整理整頓され、ルーシィの真面目な性格が見て取れる。
「中々いい部屋だな」
「綺麗だね」
そんな綺麗な部屋にスナック菓子の食べカスや袋のゴミを撒き散らしている者が二人。菓子を食うのは構わないが、綺麗に食べようぜ。この二人に言っても無駄か。ハッピーは生の魚かじってるし。
「そりゃ越してきたばかりだからな……ていうかお前ら、せめて玄関から入れよ……」
二人は二階の窓から部屋に侵入、もとい入室した。二人を追い掛けた俺も窓から入ることになったんだが、まぁその辺は黙っておこう。
それにしても本がたくさんあるな。魔法に関する本、大陸の歴史に関する本、料理の本、週刊誌、色々な本が本棚に収まっていた。そういやルーシィって、読書好きだっけ？　そうやってルーシィの部屋を眺めていると、木製の机の上に置かれた紙の束を見つける。何だこれ？　自作小説……かな？　って、人の物勝手に読むのはまずいよな。
「あたしの部屋ぁぁぁ！！」
背後から大声が聞こえた。振り返ると（ナツとハッピーによる）部屋の惨状にルーシィが叫び声をあげていた。どうやら風呂に入っていたらしい。しかし一人暮らしとはいえ、バスタオル1枚でうろつくのはどうかと思うぞ。なまじスタイルが良いもんだから、視線をどこへやればいいのか困る。
「何であんた達がいるのよ！」
ルーシィはバスタオルを体に巻き付けただけの状態で、ナツに見

事な回し蹴りを決める。あいにくというか、俺の位置からは何も見えない。いや、何が見えるんだとか、そんなのはどうでもいいんだよ。
「だってミラから家決まったって聞いたから……」
「聞いたから何！？　勝手に入って来て良いわけ！？　親しき仲にも礼儀ありって言葉知らないの！？　あんた達のした事は不法侵入！　犯罪よ！　モラルの欠如もいいとこだわ！」
「オイ……そりゃあ、傷つくぞ……」
「傷ついてんのはあたしの方よ！」
ナツばかり責められるのもアレだよな。原因がどうであれ、俺も一緒に入ったのには変わりないんだし。
「悪いなルーシィ。俺がちゃんと止めるべきだった」
「えっ、ルアもいたの！？」
ルーシィの意識がこちらに向いた隙にナツは逃げだした。
「……88、59、88……Fか」
「何測ってんの！？」
一瞬にしてルーシィの顔が茹でダコのように真っ赤になり、胸を隠すように腕を組んだ。いや、すまんね。変に意識すると赤面しそうだから、とりあえず目検討で測ってみた。
「いい部屋だね」
「爪砥ぐなネコ科動物！」
そうだ。せっかくだし、あの自作小説（仮）について聞いてみるか。パッと読んだ感じ、結構しっかりした文章だったし、完成したら読ませてもらいたいんだがな。
「ルーシィ、あの文章は……」
「ダメぇぇぇっ！！」
ちょっと指差しただけでルーシィはすぐに紙束を抱きかかえ、ぺたんと座りこんでしまった。え、えーと……。
「それ……」
「ダメっ！」

「完成したら……」
「ダメっ！」
「読ませてほしいなぁ……なんて」
「ダメっ！」
ダメだこりゃ。ルーシィから逃げていたナツも気になったようで、近づいてきた。
「何か気になるな。何だよ、それ」
「何でもいいでしょ！　てかもう帰ってよぉ！」
「やだよ、遊びに来たんだし」
「超勝手！」
ダメだこりゃ（二回目）。ナツに任せてたらループしそうだ。とりあえず涙目になってるルーシィをなだめる所からだな。
「勝手に入ってごめんな、ルーシィ。でもナツもさ、来る途中ずっとルーシィと遊びたがってたし、お茶くらい出してやってくれねぇかな」
「うう……わかった……」
力無く立ちあがり、キッチンへ向かうルーシィ。
「あ、服は着た方がいいと思うよ」
「……着替えてくる！」
ルーシィはシャンプーとボディソープのいい匂いがした、とだけ言っておこう。

「もう、引っ越してきたばかりで家具も揃ってないんだから、遊ぶものなんて何も無いわよ。紅茶飲んだら帰ってよね」
ラフな格好に着替えたルーシィは、口をとがらせながら俺たちに紅茶を出した。出された紅茶をすぐに飲み干すナツ。うん、相変わらずナツらしい。
「残忍だな」
「あい」

「『紅茶飲んだら帰って』って言うだけで残忍って……」
まだ俺達がルーシィの部屋にお邪魔して１０分も経っていないが、ルーシィはどっと疲れたようだった。
「そうだ！　ルーシィ、鍵の奴ら、全部見せてくれよ」
名案と言いたげに立ちあがるナツに、賛同するハッピー。
「全部なんて、あたしの魔力もたないから嫌よ。それに『鍵の奴ら』じゃなくて『星霊』よ」
そう言いながらも、ルーシィは腰のホルダーから鍵を取り出してテーブルの上に並べ始めた。俺もルーシィの契約してる星霊には興味があったし、丁度いい機会だから見せてもらいたいが……魔力も厳しいだろうし、無理をさせるつもりはない。
「ルーシィは何人の星霊と契約してるの？」
「６体よ。星霊は１体、２体っていう風に数えるの」
テーブルに並べられた、３つの銀色の鍵と、３つの金色の鍵。金色の鍵は銀色の物よりも装飾が派手で、いかにも上位ランクの星霊って感じだ。
「この銀色のがお店で売ってる鍵。『時計座のホロロギウム』に『南十字座のクルックス』、『琴座のリラ』。それからこっちの金色のが、黄道十二門っていうゲートを開けるための超レアな鍵。『金牛宮のタウロス』、『宝瓶宮のアクエリアス』、『巨蟹宮のキャンサー』よ」
黄道十二門が３体もいるのか。
「巨蟹……カニか！？」
「カニー！」
ナツとハッピーは違う所に興味を出している。よだれがすごい出ているが、まさか食べる気じゃないだろうな。
俺も詳しくは知らないが、黄道十二門の星霊は基本的に人型と聞く。蟹がモチーフとはいえ、食べるのに躊躇するデザインであることは間違いない。
「そういえばハルジオンで買った『小犬座のニコラ』、契約するの

まだだったわ。丁度いい機会だし、星霊魔導士が星霊と契約するまでの流れを見せてあげる」
「「おおっ！」」
ハルジオンっていうと、ナツたちがルーシィと出会った時のことか？　それはおいといて、星霊魔導士が契約するところは俺も見た事が無い。興味あるな。
「ねぇねぇナツ。契約って、血判とか押すのかな？」
「痛そうだな、ケツ」
「何故お尻……？　血判とかはいらないのよ。見てて」
俺達が興味深そうに見つめる中、ルーシィが銀色の鍵を持つ右手を目の前に掲げた。
「我、星霊界との道を繋ぐ者。汝、その呼びかけに応え門（ゲート）をくぐれ」
ルーシィの口から紡ぎだされたのは、よくわからない呪文ではなく、普通に聞き取れる契約の言葉だった。なんか普通だなと思ったのは……俺だけじゃないようだな。ナツとハッピーも「……えぇ」みたいな顔してるし。
「開け、小犬座の扉……ニコラ！」
ルーシィがそう叫ぶと、鍵の先端から鍵穴のような紋章が浮かび上がり、あたりを光が包み込んだ。小さな爆発音と共に何かが現れる。煙が晴れたそこには……
「プーン！」
……なんともコメントしがたい、白い物がいた。
「「ニコラぁぁぁー！？」」
なんていうか、細い。丸い頭にドリルみたいな鼻。そして頭と同じくらいの大きさの体。犬らしき特徴が何一つ無いが、星霊ってそういうものなのだろうか。それとも小犬座っていう星座の由来を俺が勘違いしているのか？
それはともかく、すたっと床に着地したニコラは、何故かずっとぴくぴく震えている。
「ど……ドンマイ！」

「失敗じゃないわよ！」
ナツのフォロー（？）に声を荒げるルーシィは、ニコラをひょいと持ち上げるとそのまま抱きしめた。大きなバストに顔が埋まっているニコラがうらやましいとか何それそんな事思ってねぇし、ふん。
「ああん、可愛い～」
「プ～ン」
おいニコラ、やっぱそこ代われ。誰だミラにチクるとか言った奴。男は目の前に山（おっぱい）があればそこに向かって突撃するもんなんだよ。
「ゲフンゲフン」
「どうしたのルア？」
「いや、ちょっと落ち着こうと」
そうだ落ちつけ。ＫＯＯＬになれ。スペルが違ってるとかそんな野暮な突っ込みはどーだっていい。
「ニコラの門（ゲート）はあまり魔力を使わないし、愛玩星霊として人気なのよ」
「ナツぅ、人間のエゴが見えるよ」
「ああ」
「じゃ、契約に映るわよ」
「ププーン！」
ルーシィが手帳とペンを手にとってニコラと向かい合った。そうだった、あくまで今のは召喚しただけ。その星霊を使役するにはちゃんと契約しなきゃいけないんだったな。さあ、どんな契約方法なんだ！？
「月曜は？」
「プゥ～ン」
「火曜」
「プン」
「水曜」
「ププーン！」
「木曜も読んでいいのね？」

……えぇと。
「地味だな」
「あい」
俺もそう思ってたけど、あえて言わないようにしていたのに！
「はいっ！　契約完了！」
「ププーン！」
そうこうしているうちに契約は終わったらしい。とはいっても召喚してもいい曜日を聞いただけ。聞くところによると星霊によっては出す日まで決める奴もいるらしいが、ニコラは比較的単純な星霊なんだろうな。愛玩用らしいし。
「あい、随分簡単なんだね」
「確かに見た感じは簡単そうだけど、大切な事なのよ。星霊魔導士は契約……すなわち約束事を重要視するの。だから私は絶対約束だけは破らない」
そう言ったルーシィの勝ち気な笑顔を見て、何だか俺は安心感というか、そういう物を感じた。もしかしたらまだ心のどこかで、ルーシィの事をフェアリーテイルに入れて大丈夫なのかって疑っていたのかもしれない。でも、この子なら大丈夫だ。絶対にギルドが悪くなるような事はしない。
そう言えばハコベ山の一件でも、ナツが突き落とされた事に憤慨して、危険を承知で一緒に戦ってくれたっけ。うん、ルーシィってすごく良い子だ。
「そうだ、名前つけてあげようっと！」
「ニコラじゃないの？」
「それは総称でしょ！　何がいいかなぁ……そうだ！　おいで、プルー！」
「プーン！」
ニコラ、もといプルーと無邪気に笑っている彼女を見ていると、無自覚でも疑っていた自分がアホらしい。俺もまだまだ、ってことか。

「プルぅ？」
「そ！　何か語感が可愛いでしょ、プルー！」
「プーン！」
「小犬座なのにワンワン鳴かないんだね」
「あんただってニャーニャー鳴かないでしょ」
そう言えばカーム置いてきたままだったな。あいつもアレで寂しがり屋だし、早いとこ戻って機嫌取りしてやらないとな。
「俺はそろそろ戻るけど、ナツ達はどうする？」
「まだいる」
「あい」
「あんた達は少し遠慮ってもんを覚えなさいよ！」
わーわー言っているナツ達に思わず笑みがこぼれる。楽しいギルドだよなぁ、フェアリーテイルって。

「うぃーっす」
「お帰りなさい。ナツとハッピーは？」
「まだいるってさ。よっぽど気に行ったんだろうね」
どっこらしょ、とカウンター席に座る。待っていたかのようにてちてちとカームがやってきた。
「遅かったじゃない」
少しむくれているカームの頭をちょっと強めに撫でてやる。
「わぷっ……ちょっと、やめてよ」
そういいながらもまんざらではない表情で、カームは俺の手を享受していた。可愛い奴め。
「あれ？」
カームを撫でくりまわしていると、リクエストボードの方からレビィの声が聞こえた。そっちに顔を向けると、ボードの一点を注視して首をかしげている。
「エバルー屋敷の一冊２０万Ｊ（ジュエル）の仕事、誰かにとられちゃった？」

「ええ、ナツがルーシィ誘って行くって」
ああ、だから「まだいる」って言ったのか。
「あ～あ、迷ってたのになぁ……」
嘆息するレビィを、後ろにいるジェットとドロイがなだめている。どうでもいいけどあの2人、レビィに告白してどっちもふられたのって本当なのかな。
「レビィよ、行かなくてよかったかもしれんぞい」
「マスター？」
「その仕事、ちと面倒な事になって来てな。たった今依頼主から連絡があってのう」
「キャンセルですか？」
「いや……報酬を２００万Ｊにつりあげる、だそうじゃ」
そう言ってニヤリと笑うマスター。
「１０倍？」
「本一冊に２００万Ｊだと！？」
一斉に驚くギルドメンバーだが、かく言う俺も驚きを隠せない。確か依頼内容は屋敷から一冊本をとってくるってだけのはずだ。それに２００万Ｊも出すとなると……確かに何かヤバい匂いがする。まぁ、ナツ達なら大丈夫だろうけど。
「面白そうな事になってきたな……」
そう言ってニヒルな笑みを浮かべたのは上半身裸のグレイだ。
「お前、服着ろよ」
「ぬわー！？　いつの間に！？」
慌てて自分の服を探しに駆けだすグレイ。っていうかどこに脱いだのかも覚えてないんかい。
「うー、でもそんなにお金を出してまで欲しい本かぁ、やっぱり興味あるなぁ」
「れ、レビィ、本気かよ！」
本の虫のレビィにとっちゃあ、多少の危険より好奇心の方が上回ったか。後ろでうろたえてるジェットとドロイが面白いな。俺はそ

んな三人に近づいた。
「まぁ、ナツ達が帰ってきたら聞けばいいじゃねぇか」
「ルア。……でも、あのナツだよ。『本？　あー、どんなだったか忘れたな。覚えてるかハッピー』『あい、忘れました』……ってなるに決まってるよ」
「ルーシィなら教えてくれるだろうよ。あいつも本好きだからな。それよりもお前ら、暇そうだな」
リクエストボードから依頼書を1枚破り取り、三人に見せる。
「俺の仕事に付き合ってくれねーか、チーム・クロスギア」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5182w/

FAIRY WIND ～妖精は風の中で笑う～

2011年11月26日19時50分発行